高山の文化を高めた人々〈3〉

福田鋤雲・夕咲を核として

永　九郎

今年は瀧井孝作生誕百年記念行事が計画されているが、作家瀧井孝作が生まれるまでには、福田鋤雲の厚い庇護と援助があったことは作品「福田家の人達」に書かれている。

福田家は代々文芸と茶道の名望家であったが、明治になって耕作（鋤雲）東作、有作（夕咲）の秀れた三兄弟が生れた。

長兄鋤雲は旧制斐太中学の第一回卒業生で、町会、郡会、県会各議員を務め、大正元年高山町長に推され九年間その要職にあった。家業は丸福魚市場と春慶塗及び一位細工の問屋で、鋤雲自ら販路開発拡張と宣傳に、東京、名古屋、京阪へ出かけた実業家であった。漢詩を作り、俳人として河東碧梧桐と交遊があり、高山では年齢も識見も大きく違う旦那衆の鋤雲が、当時十五歳の小僧、瀧井孝作等少年達と新俳句深山会を作り、何のこだわりもなく句会をひらくなど、鋤雲の秀れた庶民性、真の文化人の面影が偲ばれ、月並俳句に浸っていた飛騨俳壇に新風を興した。

少年瀧井孝作が、恋の果て高山を出奔し幾多の試練を重ねて作家となり、芥川賞銓衡委員となり文壇で大いに活躍したが、鋤雲の支援は長くつづいた。

次男東作は、東京美術学校漆芸科に学び、「蝙蝠連ひだ丸」と号し、千社札納作仲間の風流人で、東京で四十一歳で没した。

三男夕咲については知名度余りにも高く、詳しく述べる必要もないが、作家、詩人、歌人として東京での活躍が期待されながら、家業福田屋を継ぐべき命運が待っていて大正三年高山へ帰り、大新町福田屋の帳場に坐り、遂に前掛け姿が板について了った。そしてそのことが高山の文化昂揚のために大きな力となり原動力となった。若山牧水と親交があり、鋤雲に依って俳句、夕咲に依って短歌の、夫々中央の新風が福田家を通じて高山に傳えられたのであった。

ひろく文化人としての活躍と酒を愛する粋人でもあった。鋤雲と二人で同人雑誌「ツチグモ」に始まり「山百合詩社」の結成、短歌誌「裸形」創刊、歌集「山花一束」「山づと」出版、また三味線唄「高山小唄」の作詞、考古学土俗学の代情巌、通蔵兄弟との研究、飛騨新聞の創刊主筆、飛騨短歌会創立主宰、令甥山下笛朗や長尾量平の音楽活動の協力助言、高山特有傳統趣向の「飾物」精神の確立等々が挙げられる。

飛騨春慶と一位一刀彫は共に現在「伝統工芸品産業振興法」に依り、技術保存の国家指定を受け、伝統工芸として発展して来ているが、鋤雲時代の販路開拓、宣伝、助言などが蔭にかくれた功績となっている。

夕咲と親交のあった山田白馬、鎌手白映、富田令禾、大埜間霽江、上島禅逸、牛丸抱石、内山智春、山下笛朗、吉村比呂詩、松之木栄一、長尾量平、真木潔等々皆故人となって了ったが、現在その流れを汲む多くの人が高山市文化協会を中心に活躍している。

福田家跡は「印籠美術館」となって異彩を放っている。

昭和二十三年、夕咲が四月、鋤雲が九月に逝去された。